

## 詩歌・小説の中のはきもの (第11回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

112 戦前には、まだ靴を履くことのできない日本人がたくさんいた。明治36年生れのわたしの母親は、ついに、一度も靴を履いたことのないままで死んだ。彼女は簡単服（アッパッパ）を着た時、靴を履けといわれても履けなかった。靴は、訓練していないと履けないものであるのが、そばで見ているとよくわかるのだった。

富岡多恵子

★『藤の衣に麻の衾』の「シンデレラの靴」から。手の指五本を自由に動かして、ある日急にそれを堅い革の袋に五本まとめて突っ込まれたら、どんなにか不自由なことだろう。下駄や草履から靴への転換はそれと同じぐらいのショックを日本人に与えたのである。戦前、ことに明治時代の男は軍隊で初めて靴を履く訓練を受けた人が多かったが、入営したばかりの新兵は、指の踏ん張りがきかず、よく滑ったり、つまづいて転んだりしたものだという。

113 なぜ、こんなにミュールがはやるのだろうか。関西大学社会学部の黒田勇教授（51）は「きっちりするという秩序を大切にしてきた、これまでの日本の文化に対するエモーショナルな批判だ」と分析する。大きな靴音。たどたどしい歩き方。いまにも脱げそうな危うさ。「だからやらということが、きっちりするということへのアンチテーゼになっている」。電車の中での化粧などと同じものだという。

★『お作法 不作法（朝日新聞学芸部編）』から。どんな凶悪な殺人犯にも弁護人が付くように、あのだらしなく、脅迫的なほどカン高い音を立てるミュールの弁護をする人は現れないかと思っていて見つけた記事である。私はこの解釈を知ってから、抗議とも異議申し立てとも取れるミュールの音が気にならなくなった。履いている当人はそんなことまで考えてはいないのだろう。が、私たちには自分でなんだか分からないまま行っていることはたくさんある。

114 素足にヒールを履くととんでもなく気持ちがいい。抑圧された足が、「ありがと」と繰り返しているのがわかるほどだ。そういう声を耳にするといっそビーチサンダルで仕事したるか、とまで思うが、「それはあなたの腸<sup>はらわた</sup>見せる人だけにしておいてね」と制する自分がある。

ことほどさようにカカトを見せる許容にこだわる。貞操はカカトにありか。

安藤優子

★『安藤流 着道楽のひそかな悦び』の「サンダルを履くときは、カカトにご用心！」から。首筋と手、踵の整形手術はできないから年齢を隠せないのだという。確かに踵はスキだらけである。顔や手足の爪は精一杯化粧し手入れをしている人でも踵はひどい。きついストラップを踏みつけている踵、バンドエイドなどを張りつけた踵、すでに赤むけになった踵、白くガサガサの踵、私は夏になると、見てはいけないものを見る

ように疎外され無視されたたたくさんの踵をつらつら眺めて、それらの踵に同情し慨嘆している。

115 勤めをば退きたる夫の靴磨く

明日はいづこへゆくにあらねど

村上昊子

定年後も紳士で靴磨く

成田孤舟

★『昭和万葉集』『三省堂現代川柳必携』から。何十年も続いた習慣は“定年”という社会的、人為的な区切りによっては断絶されない。その人の人生が靴を磨くという地味な日常部分で堅固につながっているというのが愛しい。習慣は第二の天性というから、この男女は確かに紳士であり淑女なのだろう。靴業にたずさわった者として、こういう人たちの句歌には泣かされてしまう。

116 春の夜のパーティで、私はK氏と向かいあって立っていた。この場の雰囲気によく合った愉しくシックな服装の氏である。その靴もなんときれいに磨かれていることか。いいかげんに拭いてきた私の靴と大ちがいで、明るい灯のもとにはずかしかった。

「さすがに全部キマっていらしゃいますね。靴も光って……」

私がそう言うと、氏は微笑した。

「靴はおしゃれの大事なポイントですよ。服なんか少々古くても、靴さえきれいならば、気分はシャンとするものです。なにしろ足場（スタンス）ですからね」

足場ということばは心に残った。登山やゴルフのとき、そのことばはよく使われるが、生きていく、心の姿勢にも、それはいえよう。光る靴で足場をかため、背すじを伸ばして颯爽と生きる—そんな生き方に心惹かれる。

清川 妙

★『しあわせの葉』から。私は独りで動いているクォーツ時計を好まない。ぜんまい時計は自分が竜頭を巻くことによって動かしている、その見返りに、時を教えてもらおう。「共生」の感覚を味わえるのだ。登山を趣味とする私が不満とするのは、昔の登山靴は指先の体温で徐々に油脂を革に溶かし込むという手入れを必要としたのに、近頃の登山靴は保革油を塗らないで下さいなどと注意書きが付いている。下手にそんなことをすると却って靴を傷めるというのだ。洋服だってネクタイだって靴のように手入れ次第で面目を一新することはない。靴は可愛がることのできる貴重なものである。

117 「ゲタですがね。足の親指と人差し指の間に鼻緒をはさんで歩くわけだけど、足がね、自分の才覚で鼻緒をはさむ。日本人の足はそういう才覚に恵まれているんですね。ゲタをはいていると、からだの平衡感覚が養われる気がする。このごろ日本人はゲタを忘れていますが、折角遺伝された足指の才覚が、萎えてしまう。子供のときからもっとゲタをはいた方がいいと思いますよ。手は、表にあらわれた脳だ、といいますが、こんど、典子ちゃん（※サリドマイド障害児）とつきあって、足も脳であるをつくづく思いました。」

松山善三

★『風の行方—私の紳士録』（増田れい子）から。父は建築施工を生業にしていたので、私もしばしば屋根に上った。ある日テニスシューズを履いて現場に行ったところ、現場監督が屋根に上らせてくれない。爪先に力を入らないそんな靴では足許が危ないというのだ。「ゴム足袋」という地下足袋の底の薄いものに履き替えてやっと作業をさせて貰えた。爪先の割れたゴム足袋には屋根をつかむような感触が確かにあった。

118 靴の大きさを文（もん）ではかるのは足袋からきたのである。江戸時代に足袋の底の長さをはかるのに寛永通宝の一文銭、つまり最もありふれた小銭をつかった。これをタテにならべて、10枚分の長さが十文（ともん）である（「じゅうもん」といわないでくださいね。）一文銭の直径は2センチ4ミリほどだから、いまの10円くらいである。したがって十文は24センチほど。…美人の足は八（や）文七分に定まれりと西鶴が言っている。21センチほどである。

高島俊男

★『お言葉ですが…④』から。ゴルフはヤードだし、飛行機に乗れば高度表示はフィートである。そんな中で「おかみに弱く、それよりさらに西洋に弱いマスコミ」が、ジャイアント・馬場の「十六文キック」だけには手をつけられなかったのは痛快だ、と著者は言う。その国はその国独自の“尺度”を持っている。麦粒や足そのものの長さを使っている国は文化を大切にしているのだ。長い習慣をイッキに抹殺するなんて間尺に合わない話である。日本人が自分の“腕の骨”を使えないなんて全くシャク（尺）な話ですねえ。

119 私はここでいたずら心が起きてしまった。靴会社のパーティーだ。どうせなら皆を驚かせようと、片方ずつ色違いに右足は黒色の靴、左足に茶色の靴を履いて行った。パーティー会場に行ったら、予想通り皆が驚いたり笑ったりしてくれた。

石津謙介

★『悠貧ダンディズム』から。この話にはオチがついていて、得意げに社長夫人の前に挨拶に行くと、夫人は左右まったく形も色も異なる靴を履いていたので、「恐れ入った」というのである。靴はどうして左右対称でなくてはいけないのだろうか。考えてみ

れば不思議な話だ。誰か左右異色異型のコンビネーションを楽しめる靴を大流行させてくれないものだろうか。

120 脱いである奥さまの靴の中が、なんとなく汚れているのは、あなたがお美しくっていらっしゃればいるほど、嫌なものです。

外側と同じように、内側にも気を配って下さい。

春昼やほそく脱がれし女沓

永井龍男

★『わが女房教育』から。会社の洗面台を使った後、飛び散った水滴を自分のハンカチで拭う人が昔は、いくらもいた。そんな人の靴はよく磨かれていたが、内側も奇麗に手入れされているのが常だった。靴の内側に気を配って、初めて紳士淑女といえる、いまさらそんな口やかましいことを言うのは野暮と承知している。それにくらべて俳句を添えた永井の言い方のなんとスマートなこと！

121 たなびきし昔の赤裳たちきりて

靴ふみならず大宮をとめ

大久保忠保

★明治11年発刊の『明治開化和歌集』から。明治19年6月、政府は、「皇族以下有爵者夫人への洋装の規定」を発表。翌年1月、皇后陛下から「婦人の洋装奨励の思召書」伝達。これが上流婦人に洋装の広まるきっかけになった。当時の人には、あの優美な宮廷の官女の靴がいかつく、猛々しいものに見えたのである。同じころの俳句に「あられなや花をわけ入る靴の音 梅宿」がある。なんて乱暴なことだ、と驚くのは、心の底で靴に対する敵意をもっていたからである。